風がひとり

小説 竹久夢二

栗田藤平

風がひとり

小説 竹久夢二

栗田藤平

著者略歴

栗田 藤平（くりた とうへい）
1926年9月，福岡県に生まれる。
旧制第七高等学校，九州大学英文科卒。毎日新聞記者を経て，現在フリー。作品に「あの夏の死」（『すばる』1978年6月号），「青銅色の闇」（『すばる』1979年2月号，ほるぷ社『日本の原爆文学』第11巻に収録）等がある。

風がひとり　小説竹久夢二

一九九二年一一月三〇日　初版第一刷発行

著　者――栗田藤平
福岡県遠賀郡遠賀町虫生津六二七
郵便番号八一一―四三
電話〇九三二―二九三―一八七八

発行者――福田信夫

発行所――武蔵野書房
国分寺市本多二―九―八
電話〇四二三―二六―〇二〇一（代）／郵便番号一八五
FAX　〇四二三―二五―八八六二
郵便振替・東京　八―九一一二九

印刷／ミツワ印刷　製本／誠製本
装幀／エディトリアルデザイン研究所

不良本は送料小社負担でお取り換えいたします。
定価二、四〇〇円（本体価格二、三三〇円、税七〇円、送料小社負担）

風がひとり

小説竹久夢二

この書を、亡き父と母に捧げる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

I 「宵待草」異聞——大逆事件の周辺で

プロローグ……8
1 出会い……13
2 大いなる眼……22
3 諍い……29
4 離婚の後……40
5 流行児……50
6 留置場……57
7 反戦……63
8 脱落者……71
9 秋水の通夜……80
10 啄木哀悼……88

11 犬吠埼……94

Ⅱ 泊心中未遂——たまきとの別れ

1 疾風怒濤……102
2 蕩　児……108
3 新しい女たち……121
4 サド・マゾ……126
5 港屋時代……132
6 小さな情事……139
7 殺　意……143
8 一家離散……150
9 黒い焔……160

Ⅲ 修善寺の遺書前後——彦乃の死まで

1 童　画……172

2　蝶の知らぬ花……178
3　青一色……184
4　春の雪……193
5　八坂の塔……198
6　愛……207
7　蝸牛……212
8　FARE WELL……223
9　涙……228
あとがき……240
主な参考文献……242

I

「宵待草」異聞——大逆事件の周辺で——

プロローグ

BROKEN MILL AND BROKEN HEART（破れた水車と破れた心）——

明治四十一年の秋、竹久夢二はこの題の水彩画を持って、東京美術学校教授・岡田三郎助を訪ねた。二十四歳の夢二は暗い顔をしていた。もともと口数は少なく、浅黒い顔に白い歯をのぞかせている。ここ二、三年、挿絵を主体に新聞、雑誌にほぼ毎月名前はのるようになったが、画はほとんど独学でやってきた。このさい本格的に勉強するため美術学校にすすみたい。生涯画家として立てるかどうか。自負はある。しかし自信はない。そこのところが正統派の岡田の眼にどう映るか、聞いてみたかった。

画は東京小石川関口の川べり。暴風雨の翌日、水車場が壊れて、川に架かった木製の導水溝のところどころから水がこぼれ、飛び散っている。動きがあるのは、その部分だけ。あとは苔むした板張りの小舎が画面いっぱい、質実な写実で描かれている。

夢二は最初、下宿の近くに住む水彩画家・大下藤次郎（のちの『みずゑ』創刊者）に見てもらった。大下は「うむ、私にはどういっていいかわからない。これは岡田君の許へいったら、参考になる話が聞かれるだろう」と言って、紹介状を書いてくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

岡田は夢二にとって初対面の人である。明治三十年、文部省の留学生としてパリに渡り、ラファエル・コランに師事、六年後帰国と同時に創設された東京美術学校教授となった。〝婦人像の岡田〟として知られ、最新のヨーロッパ美術界の空気を直接吸っている。だから夢二はひどく緊張して画を差し出した。

岡田はていねいに画を見た。黙っているが、眼に温か味がある。夢二は思い切って訊いた。

「先生、私は美術学校に入って、正則に勉強したいのですが」

岡田はしばらく眼を瞑って考えたあと、おもむろに言った。

「美術学校というところは画のＡＢＣを教えるところだし、生徒をみんな一様に育て上げるのだから、君には向かない。向かないばかりではなく、せっかく君の持っている天分をこわすかもしれない」

夢二は顔が硬ばった。君には向かない、というのは画家として失格という意味だろうか。しかし、せっかくの君の天分、とも言われた。自分に生まれつきの才能のかけらでもあるのなら、と思うと、つい気持が上ずってしまった。

「それでは私は勉強しないでもエラクなれましょうか」

「いや、学校の生徒よりもっと勉強しなくてはいけない。自分の傾向に一番ふさわしいデッサンをしっかりやって、自分を自分で育ててゆかなくてはならない」

「ではどうして、そのデッサンをやりましょうか」

「どこか自由な研究所へでもゆくとよい」

前年の三月、上野で開かれた東京勧業博覧会で、夢二は青木繁の「わだつみのいろこの宮」、藤島武二の「不忍池畔納涼図」をみて深い感銘をうけ、こんな美人画を自分も描きたい、と心に期していた。これら先達がもっている浪漫的風潮のよってくるところは、ヨーロッパのアール・ヌーヴォーや世紀末芸術であることを、夢二は雑誌などで見聞きして知っていた。だから雅号は「武二」にあやかって「夢二」とつけたほどの私淑ぶりだった。パリで学んだ岡田に対しても、夢二は同じような肌合いを感じていた。岡田は裸婦や風景を明るい抒情的なタッチで描く。女を描くとき、正面切った笑い顔よりも、首筋から横顔をのぞかせる感じが好きだったし、形よりも色彩にデリケートな感覚をもつ人だ、と思った。画からうける印象は、いま眼の前の優雅で上品な人柄とピタリ一致している。

途中から八千代夫人も同席した。面長の美人で、眼が大きく、唇がやや厚い。

劇作家・小山内薫の妹で、森鷗外が世話して二年前、岡田三郎助と結婚した。このころすでに早稲田文学、新小説、万朝報（よろずちょうほう）など各種の雑誌、新聞に小説を書き、才女として知られていた。

「まあ、いい画ですこと。色彩が落ちついているし、こぼれ散る水がまるで宝石のよう」

明るい、しみじみとした声で言った。

「夢二さん、まだお若いわ。私とあまり年は違わないようね。ときどき遊びにいらっしゃい。主人がきっと画を見てくれるでしょうよ」

夢二は夫妻の好意をしっかり感じとった。家庭的な温かさだけでなく、芸術の上で一段高いところから指針を与えてくれる。岡田の一言一言は時間がたつにつれて、重く腹に沈んでくる。この方は自分の画をわかってくれた。画は個性であるという考えが根っこにある。美校にすすむことにはっきり反対し、自分で自分の道を切り拓けという。ありがたい助言だったが、夢二の臆病な心は突き放された感じを強めている。デッサンをみっちりやれといわれても、学校にゆかずに何をどうすればいいか、いまは五里霧中の状態だった。岡田邸を辞して帰る途々、希望と不安がこもごも湧き、夢二はノロノロと重い足どりで歩いた。心に嵐の予兆があり、雲がしきりに早く飛んだ。

このころ夢二は年上の妻たまきとの間が行き詰まり状態に陥っていた。夢二が挿絵画家として名前を知られてくるにつれ、勝気なたまきは夢二を画家として成功させたい気持を露骨にあらわすようになった。太平洋画会に通い始めると、たまきもついてきて、いっぱし批評めいたことを言う。

「美校にゆかないとほんものになれないわ」

ある日、たまきは高飛車に夢二を極めつけた。それは夢二の弱点を刺す言葉だった。夢二は自分の画技に懐疑が生じている。雑誌に売れるくらいで満足する気はない。画家として本道を歩むために美校に進むべきかどうか、真剣に考えているところだったが、それを先に言われるとおもしろくない。

宮崎与平（後、渡辺姓）は夢二より一年遅れて『中学世界』に投稿を始め、やがて〝夢二・与平〟ともてはやされるようになったが、二人はライバル意識も強かった。その与平が四十一年に第二回

文展に入選したとたんに、夢二も官展を強く意識するようになった。

この年の初め、長男の虹之助が生まれた。家庭はうっとうしく、たまきとの間に痴話喧嘩が絶えず、夢二の気持は荒むばかりであった。

このとき夢二は画家として岐路に立っていた、といっていい。持参した水車小舎の画は、夢二には珍しく写実的で、アカデミックなものである。同じ年に描いた少女像「草分けの家」も素直なタッチである。ここにとどまるべきか、この壁を突き破るべきか、家庭の危機の中で悩みつづけた。

水車小舎の画面の下方に英語で書かれた画題の「破れた心」について、夢二は「私が歩いて来た道」の中で「水車場の主人が悲しそうな顔をして水車を見ている図」と言っている。ところが主人の姿は画面のどこにもない。眼に見えないもので心に訴えかける。これが夢二の抒情である。画は詩なのである。「画は自分にとって内部生活の報告だ」という夢二芸術は、ここにはっきり蕾(つぼみ)の形で生まれていたのである。

美校ごとき小箱に自分を閉じこめ、天分を殺すな、という岡田の戒めは突き放したようで、正しく夢二の針路を指し示していた。この道はどんなに苦しくても、一人で歩いていくしかないものだ。こうして夢二は画家として生涯師につかず、画壇に属せず、美術団体や公募展とも無縁で、美術界のアウトサイダーとしておんな絵を描き、奔放に特異な芸術を完成する。

岡田と会った後、夢二は旅に出る。家族に行く先も告げず、気ままに、しかし血のにじむように侘しい模索の旅であった。たまきが後年に書いた『夢二の想出』によると、「その旅行は約三ヵ月

ほどで行方定めぬ旅でした。もう暮になり寒さの仕度もいるころになり、ぶらり無案内で帰ってきました。懐中銅貨二銭を持って帰りました」

夢二はこの翌春に父の意向でたまきを離縁するが、最初の著作『夢二画集 春の巻』によって一躍ベストセラー画家となり、たまきと復縁、以後、同棲と別居を繰り返す。

岡田夫妻は、このあとも陰に陽に夢二を扶ける。特に八千代は夢二家が乱れに乱れ、夫婦、三人の子供がバラバラになって一家離散するとき、夫婦の別れ話、幼な児たちの世話、第三子を養子に出すについて、その身元保証人になるなど、面倒を見つづける。

『春の巻』の成功の後、夢二は官展への誘惑をきれいに断ち切り、自由に生き、名声を高め、最晩年落魄して死ぬまで、先生と呼んだのはごく少数だが、その一人は岡田三郎助だった。夢二の五十年にわたる人生と芸術を顧るとき、岡田から最初にうけた助言――個性を活かせ――を忠実に守って、夢二は自分の天分を活かし切った、といえる。

1　出会い

小高い丘の陰の住宅地に小さなキリスト教の講義所（教会）があった。たそがれの街をもう一時間余り歩きつづけた竹久たまきは、ふと立ち止まり、まだ新しい木の看板に眼を吸い寄せられた。

道端の電柱に裸電球が下がり、黄色い光線が壁面の十字架をぼんやり照らしていた。普通の民家を改造したらしく、格子づくりの窓、正面の木のドアは淡いグリーンに塗られている。

上り坂を息急いて来た。心臓が飛び出しそうだった。「子供を盗(と)られる」「なぜ、なぜ、こんなことが」。鼓動と一緒に問いを繰り返す。前方に黒々と山が盛り上がっている。星が三つ四つ瞬いている。振り返ると北の工場街が一目で、無数の煙突が林立している。煙や塵埃が絶えず湧き、上空に漂い、火焔を反映して火事場のように明るい。後方は暗い入り海である。十年程前、この八幡に官営製鉄所ができた。昼間なら東方の丘に総赤レンガ、二階建の製鉄所本事務所が見えるが、いま黒い輪郭を浮かべ、どの窓にも灯がともり、静かな満艦飾の装いである。その手前の広い台地に住宅が建てこんで、薄墨色に沈んでいる。家庭はまだほとんどランプで、その侘しさをハネ返すように、アーク灯が住宅街にポツンポツンと配置され、光を十字形に放っている。

製鉄所本事務所の下の住宅地に竹久の実家があった。たまきは誕生すぎの長男虹之助を東京から背負って来て、もう十日余りになる。夢二は『中学世界』『少女の友』などの挿絵の締切りが迫っていることを口実に、東京に残っていた。

赤ん坊は昼間、義母の也須能(やすの)がとり上げ、むずかると牛乳を浸したガーゼを吸わせ、たまきは夜だけ添い寝している。乳首にショウガ汁を塗っているうちに、やっと乳を離れて眠るようになった。すると早速、義父の菊蔵から「あす、子供は置いて一人で東京に帰れ」という宣告を受けた。予期はしていたが、とたんに頭の中は真っ白になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com